

隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について

——発生時期が意味するもの——

藤井政彦

はじめに

中国に受容された弥勒信仰の盛衰の歴史については、既に多くの研究者による見解が出されている。⁽¹⁾ それらによれば、大よそ、南北朝時代に流行し、隋から唐にかけて阿弥陀信仰や観音信仰の台頭とともに衰落していった、とすることができよう。中国史上初の「弥勒出世」を標榜した反乱は、まさに隋末という衰落への過渡期に起こった。

従来、この反乱は弥勒下生信仰に依拠した事例として捉えられ、下生信仰の根強い広がりとその精神的紐帯とした信徒集団の存在が想定される。その上で、弥勒信仰が流行していた北魏時代の仏教反乱の中にも下生信仰の影響を受けたとされる事例があることから、両者間の思想的関連を指摘し、同系列上で理解される場合が多い。⁽²⁾

だがしかし、隋末の反乱の歴史的意義を考えるならば、なぜ隋末という時期に起こったのかということが重要な問題と

なる。そしてこれは、なぜ北魏時代には起こらなかったのかという問題と表裏の関係にあることは言うまでもない。既にこれに関する言及は先行研究にも見えるが、⁽³⁾ 下生信仰そのもののあり方にまで踏み込んだ検討は為されなかったように思う。そこで、本稿では、これらの点を踏まえ、発生時期を焦点に、隋末に起こった意味について検討して行きたい。

一

最初に、関連史料から隋末の弥勒出世を標榜した反乱の詳細を確認しておく。該当する事例には、蜂起に至らなかったケースも含めて三件を数えることができる。まず一件目は大業六年（六一〇）に洛陽城内で起こった事件である。

六年春正月癸亥朔旦、有盗数十人、皆素冠練衣、焚香持華、自称弥勒仏、入自建国门。監門者皆稽首、既而奪衛士仗、將為乱。齐王暕遇而斬之。於是都下大索、与相連坐者千余家。（『隋書』卷三、煬帝紀上）

隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について（藤井）

五四

正月一日に盜賊数十人が、白い冠と衣服を身に着け、香を焚き手に華を持って、「弥勒仏」と自称し、建国門から入って乱を起こそうとした。齊王暕の活躍により未然に防がれたが、城内を搜索すると連座する者が千余家あったという。他に『隋書』卷二三・五行志下にも同じ内容の記事がある。ここでは「自称弥勒仏出世」となっている。

二件目は大業九年（六一三）に起こった宋子賢の乱である。

九年、帝在高陽。唐县人宋子賢、善為幻術。每夜、樓上有光明、能變作仏形、自称弥勒出世。又懸大鏡於堂上、紙素上画為蛇為獸及人形。有人來礼謁者、輒側其鏡、遣觀來生形像。或映見紙上蛇形、子賢輒告云「此罪業也、当更礼念。」又令礼謁、乃転人形示之。遠近惑信、日数百千人。遂潜謀作乱、將為無遮仏会、因拳兵、欲襲擊乘輿。事泄、鷹揚郎將以兵捕之。夜至其所、遷其所居、但見火坑、兵不敢進。郎將曰「此地素無坑、止妖妄耳。」及進、無復火矣。遂擒斬之、并坐其党与千余家。（『隋書』卷二三、五行志下）

煬帝が高陽（河北省定県）に滞在した時のことである。幻術を得意としていた唐県（河北省唐県）出身の宋子賢が、毎夜、樓上で光明を灯し、仏の姿に変化させて「弥勒出世」と自称した。さらに、紙や絹に書いた蛇や獸や人の絵を大鏡に映して来世の姿を見せるなど、仕掛けを使って人々の信仰を集めて反乱を謀ったが、計画が漏洩して捕らえられた。この事件でも連座する者が千余家あったという。

そして三件目が同じく大業九年（六一三）に起こった向海

明の乱である。

（十二月）丁亥、扶風人向海明拳兵作乱、称皇帝、建元白鳥。遣太僕卿楊義臣擊破之。（『隋書』卷四、煬帝紀下）

とあり、一方で、

其後復有桑門向海明、於扶風自称弥勒仏出世、潜謀逆乱。人有帰心者、輒獲吉夢。由是人皆惑之、三輔之士、翕然称为大聖。因拳兵反、衆至数万。官軍擊破之。（『隋書』卷二三、五行志下）

とあるように、沙門向海明が皇帝を称し、元号を建てる傍ら、「弥勒仏出世」を称え、帰依する者は吉夢を得ることができるとして信者を集めて蜂起した。この反乱では五万の民衆が参加した。他に『隋書』卷六三、楊義臣伝にも関連記事がある。

以上が三件の反乱の顛末である。發生の土壤となった社会的背景に関する一連の考察は先行研究に詳しいのでここでは触れないこととする。それでは次に、思想的関連が指摘される北魏時代の仏教反乱と下生信仰について見ていくことしよう。

二

従来、下生信仰の影響を受けているとされる仏教反乱には次のような事例が挙げられる。

年号を「聖君」とした司馬小君の乱（延興元年（四七一）、「聖

王」を自称した司馬惠御の乱（太和一四年（四九〇）、「浄居国明法王」を自称した沙門劉僧紹の乱（延昌三年（五一四）、「新仏出世」を唱えた大乘の乱（延昌四年（五一五））、そして、月光童子を称した劉景暉の事件（熙平年間（五一六―五一八））である。⁽⁴⁾

これらは要するに、「聖君」や「聖王」、「浄居国明法王」が転輪聖王に擬えた年号あるいは称号であり、「新仏出世」は弥勒の出世を意味し、「月光童子」もまた弥勒が下生する前にこの世を治める仏教的理想君主として、⁽⁵⁾総じて下生信仰の枠内で理解される。

ところで、この場合の前提にある下生信仰は、久遠の未来、転輪聖王が治める太平の世界に弥勒が下生する時に自分も生まれ、竜華樹の下で行う三度の説法に与りたいという、弥勒經典に依拠したものである。

従ってこれに依れば、弥勒は遠い未来に転輪聖王が治める太平の世界に下生する存在であるから、弥勒自身に切迫感を伴った形で民衆を塗炭の苦しみから救う救済者の要素は無いことになる。⁽⁶⁾事実、「聖君」や「聖王」、「浄居国明法王」、「月光童子」のように、転輪聖王を打ち出している時点で、弥勒は太平の世界が訪れた後に意識される存在であることがわかる。

ただし、それでは「新仏出世」を唱えた大乘の乱はどう理

解すべきかという問題が残る。これまでも北魏と隋末の両反乱を同系列上で捉える根拠として大乘の乱は有力な事例となってきた。以下、聊か説明を要するので先に関連記事を挙げて反乱の詳細を示す。

時冀州沙門法慶既為妖幻、遂説勃海人李婦伯。婦伯合家從之、招率鄉人、推法慶為主。法慶以婦伯為十住菩薩・平魔軍司・定漢王。自号大乘。殺一人者為一住菩薩、殺十人者為十住菩薩。又合狂藥、令人服之、父子兄弟不相知識、唯以殺害為事。：凶衆遂盛、所在屠滅寺舍、斬戮僧尼、焚燒經像、云「新仏出世、除去衆魔。」詔以遥為使持節都督北征諸軍事、討破之。禽法慶并其妻尼惠暉等、斬法慶、伝首京師、戮於都市。（『北史』卷一七、元遥伝）

先行研究では押し並べて「新仏」は「弥勒」として理解し、もっぱら「新仏」とした理由に対する解釈に力が注がれた。確かに、釈迦の次に新たに成仏する「弥勒」を指すとする考え方は極めて妥当であるかのよう見えるが、記事内容からすれば「新仏出世」は首謀者である沙門法慶の自称ではなく、蜂起後、しかも寺舎・僧尼・経像を毀壞する際に反乱参加者が唱えたスローガンの表現であった。

他方、大乘の乱の名の由来は、法慶が自称した「大乘」である。さらに「一人を殺す者を一住菩薩と為し、十人を殺す者を十住菩薩と為し」した教義や、また狂薬を調合するような行為を中心に集団を結成し、民衆を「唯だ殺害を以て事となす」ような行動に駆り立てた。つまり、精神的な抛り所となっ

隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について（藤井）

五六

たのはすべて法慶の言動であり、少なくともこれを見る限り下生信仰の影響は見られないのである。本当に「新仏」は「弥勒」を指すのか。

これについては既に拙稿の中で私見を提示した⁽⁷⁾。それは法慶の沙門像に対する検討を通して大乘の乱の実態解明を進めた試論であったが、検討過程で法慶が習禪者であることに言及し、北魏時代の弥勒信仰が皇帝崇拜と結びついた状況、それに対して皇帝権力と仏教界に反旗を翻した大乘の乱の性格、そして法慶自身の反乱集団内におけるカリスマ的存在感を考慮し、「新仏」とは弥勒を含む諸仏とは区別する表現であり、実際には法慶自身を指すことを指摘したのである。詳しくは、拙稿を参照していただきたい。

とするならば、北魏の仏教反乱が「弥勒出世」を標榜しなかったのは転輪聖王を通して弥勒を意識する下生信仰のあり方に理由があると考えることができる。そして反対にはつきりと「弥勒出世」を標榜した隋末の反乱とは、依拠した下生信仰そのものの違いが浮かび上がってくるのである。

三

そこで注目するのは下生信仰と南北朝末期に興起する末法思想との関係である⁽⁸⁾。仏教における終末観である末法思想は正像末の三時観で構成され中国で成立したが、初めて末法を

提唱した慧思は『立誓願文』の中で、

入末法過九千八百年後、月光菩薩出真丹国、説法大度衆生、滿五十二年入涅槃後、首楞嚴經、般舟三昧、先滅不現。余經次第滅、無量壽經在後、得百年住、大度衆生。然後滅去、至大惡世。我今誓願、持令不滅。教化衆生、至弥勒仏出。仏從癸酉年入涅槃後、至未來賢劫初、弥勒成仏時、有五十六億萬歲。（大正藏四六、七八六下）

と、月光菩薩の五二二年前の統治後、『首楞嚴經』、『般舟三昧經』、『無量壽經』などの經典が滅して大惡世に至ったあと弥勒が下生するとしている。すなわち、ここでは弥勒が悪世を救う救済者として描かれるのである。桐谷征一氏によれば、末法思想は教法の滅尽のみで終わるのではなく、救済の思想とも表裏一体であるとされ⁽⁹⁾、その救済がすなわち下生信仰と繋がるのである。

同様のプロットで説かれる經典に、慧思も参照したとされる『法滅尽經』⁽¹⁰⁾があり、既に六世紀初めに中国で撰述されていることから、或いは法滅尽のあとに下生する救済者としての弥勒が北魏の仏教反乱時にも意識されていたと考えることもできようが、いくら法滅尽を説く經典が出現したとしても、經典に説かれることが現実の事実となつているとか、それに近い状態を呈しているとかということでは始めてその經典に対する関心が起こるのであり⁽¹¹⁾、それには末法思想の興起を待たねばならない。

慧思が末法を自覚したような仏教団内の腐敗、当時の社会的混乱⁽¹²⁾、さらに西北インドで激しい仏教迫害を受け中国にやってきた那連提耶舎による『大集経』「月藏分」や『蓮華面経』などの末法經典の訳出⁽¹³⁾、そして北周武帝が断行した廢仏事件が大きな要因となつて、より現実に末法到来が民衆に受け止められ、定着していったのだろう。

この流れと軌を一にするかのように、弥勒の名を冠した中国撰述經典が南北朝末期から隋にかけて出現する。例えば、隋法経『衆経目錄』卷二「衆経偽妄六」にある『弥勒成仏伏魔経』(大正藏五五、一二六下)などは、經典名から弥勒が救済者として魔を調伏する内容であろうと類推でき、唐智昇『開元积経録』卷一八「別録中疑惑再詳録第六」には、四つの中国撰述經典を挙げたあとの説明で、

右四経、並是妖徒偽造。其中說弥勒如来即欲下生等事(謹按正経從釈迦滅後人間經五十七俱胝六十百千歳、贈部洲人寿增八万、弥勒如来方始出世。豈可寿年滅百而有弥勒下生耶)以斯妖妄、誘惑凡愚、淺識之流、多從信受。因斯墜没、可謂傷哉。故此甄明特希詳鑑耳。(大正藏五五、六七二下)

とあるように、それぞれの經典に説かれる弥勒下生の時期を問題視し、弥勒が非常に近い将来出世することが説かれた事に対して批判をしている。

果たして、下生信仰は南北朝末期に興起した末法思想と融

隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について(藤 井)

合することにより悪世を救う救済者の性格を獲得した。さらに法滅の危機を現実のものとして民衆に受け止められたとき、遠い未来ではなくより切迫したかたちで弥勒の下生が意識されたと考えられる。

小結

北周の廢仏事件を経て隋代に入り文帝による仏教復興政策がとられると、末法仏教運動が急速に展開し、信行の三階教や道綽の浄土教が創唱され、唐に入つて瞬く間に勢力を拡大した。そのような時代背景を考えれば、救いを求める側の民衆に現今が末法の悪世であるという危機意識は相当深く浸透していたと考えられる。そうした中で弥勒出世を標榜した反乱が起こったことは、まさに末法思想との融合により救済者の性格を獲得した下生信仰が民衆反乱に利用された最初の事例であると位置づけることができよう。

そして、北魏仏教反乱とはその思想的関連から連続性を強調するよりも、下生信仰の変質を評価し、一線を画す事例として捉えるべきであると考える。

1 主に、塚本善隆「竜門石窟に現れたる北魏仏教」(『支那仏教史研究 北魏篇』弘文堂、一九四二年。のち『塚本善隆著作集』第二卷 大東出版社、一九七四年所収)、佐藤智水「北魏造像銘

隋末の「弥勒出世」を標榜した反乱について（藤井）

五八

- 考」〔『史学雑誌』八六、一九七七年。のち『北魏仏教史論考』（岡山大学文学部研究叢書一五、一九九八年）第二章「北魏の造像銘」、唐長孺「北朝の弥勒信仰及其衰落」（『魏晋南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年）、方立天「略論我国的弥勒信仰」（『仏学研究』一九九三年第二期）、礪波護『隋唐の仏教と国家』Ⅱ「唐中期の仏教と国家」の二「造像銘に現れた唐仏教」（中公文庫、一九九九年）など参照。
- 2 重松俊章「唐宋時代の弥勒教匪」（『史淵』三、一九三六年）、塚本善隆「北魏の仏教匪」（『支那仏教史学』三一二、一九三九年。のち『塚本善隆著作集』第二卷 大東出版社、一九七四年所収）、気賀沢保規「隋末弥勒教の反乱をめぐる一考察」（『仏教史学研究』二三一一、一九八一年）、渡辺孝「北魏大乘教の乱をめぐる一考察」（野口鉄郎編『中国史における乱の構図』雄山閣出版、一九八六年）など参照。
- 3 管見に依れば前掲注（2）気賀沢論文がこの問題について言及している。
（大谷大学非常勤講師）
- 4 前掲注（2）に挙げた諸論文参照。
- 5 月光童子信仰に関しては、前掲注（2）塚本論文、砂山稔「月光童子劉景暉の反乱と首羅比丘経―月光童子譏を中心として―」（『東方学』五一、一九七六年）、Erik Zürcher, "Prince moonlight: Messianism and eschatology in early medieval Chinese Buddhism," *Young Pao* 68 (1982) など参照。
- 6 明神洋「仏教の終末観と救済思想―インドから中国へ―」道敎文化研究会編『道敎文化への展望』Ⅲに所収。平河出版社、一九九四年。
- 7 拙稿「北魏大乘の乱についての一考察―沙門法慶の背景をめぐって―」（『大谷大学史学論究』一五、二〇一〇年）。
- 8 桐谷征一「中国仏教における末法思想の形成と展開（上）」（佐々木孝憲博士古稀記念論集『仏敎学仏敎史論集』山喜房、二〇〇二年）等で既に指摘している。
- 9 前掲注（8）桐谷論文参照。
- 10 菊池章太「李弘と弥勒―天師道の改革と中国仏教における救世主信仰の成立―」（山田利明等編『道敎の歴史と文化』雄山閣出版、一九九八年）に詳しい。
- 11 藤堂恭俊「シナ仏教における危機観―特に隋、唐時代以前における諸問題」（『仏敎大学大学院紀要』四〇、一九六一年）。
- 12 川勝義雄「中国的新仏敎形成へのエネルギー」（『中国中世の社会と文化』京都大学人文科学研究所、一九八二年）。
- 13 藤善真澄「末法家としての那連提黎耶舍―周隋革命と徳護長者経―」（『東洋史研究』四六一、一九八七年）。